

第一章 夕顔の物語 夏の物語

[第一段 源氏、五条の大式乳母を見舞う]

(ところで源氏は其の頃、紀伊守邸とは別に)六条わたりの(六条近くに住まう女の所に)御忍び歩き(ありき)のころ(忍び通いをしていたが)、内裏よりまかでたまふ(御所から其処へ向かう)中宿に(なかやどりに、途中の休憩所にしていた中に)、*大式の乳母(だいにのめのと)のいたくわづらひて尼になり(所があつて)、とぶらはむとて(其の日は其の乳母を見舞おうと)、五条なる家尋ねておはしたり(五条にある其の家を訪ねて御出でに成りました)。*「大式」は大宰府だざいふの副長官で位は殿上である。「大式の乳母」とは、その大式なる夫を持つ源氏の乳母のこと。大宰府は九州治安の武官だが、当時の外国といえば朝鮮半島と其の背後の中国なので、特に対馬の警備は国防そのものであり、寧ろ其の備えとしての筑豊管理と見るべきだろう。実際、その後の国内外の内政重視情勢によって、平安期を通して其の実権は徐々に衰退したらしい。同様の事情は、薩摩琉球目付の宇佐八幡にも見られるようだ。

御車入るべき門は(おんくるまいるべきかどは、御車口の正門は)鎖したりければ(閉じられていたので)、人して(供人に)惟光(これみつ、乳母の子で源氏の旧知)召させて(を呼び立てて、門を開かせようとしたが)、待たせたまひけるほど(お待ちになっている間に源氏は)、むつかしげなる(むさ苦しく雑然とした)大路のさま(おほちのさま、五条大路の様子)を見わたしたまへるに、この家の傍(かたはら、横隣)に、桧垣(ひがき、ヒノキの薄板を編んだ囲い)といふもの新しうして(壁を新しくして)、上は(かみは、其の上部は)半蔀(はじとみ、外掲げの板窓)四五間ばかり上げわたして(吊り開いて)、簾(すだれ)などもいと白う(まっさらで)涼しげなるに、をかしき(美しそうな)額つきの(髪姿の)透影(透き見える人影)、あまた見えて覗く(いくつも見えて此方を覗いている)。立ち然迷うふらむ(さまよふらむ、動いているらしい)下つ方(しもつかた、下半身まで)思ひやるに(想像すると)、あながちに丈高き(非常に背が高いように)心地ぞする(感じられる)。いかなる者の集へるならむと、容変はりて(やうかはりて、変わった様子のように)思さる(お思いなさる)。

御車も(今日の源氏の御車は)いたく(随分)やつし(地味な)たまへり(もので)、前駆も(さきも、先立ちにも)追はせたまはず(前払いなどさせず)、誰れとか知らむと(高貴な者と知られぬように)うちとけたまひて(気楽な態で居たので)、すこし差し覗き給へれば(さしのぞきたまへれば、身を乗り出してご覧に為ると)、門は蔀のやうなる、押し上げたる(其の家の門はシトミ戸のような薄板を棒で押し上げてあつて)、見入れのほどなく(狭く奥行きが無い)、ものはかなき住まひを(簡単な作りの住まいとご覧になって)、あはれに(物寂しくも感じられたが)、「何処かさして(いずこかさして、棲めば宮処)」と思ほしなせば(という歌を思い出して考えるなら)、玉の台も(たまのうてなも、立派な御殿に住んでも、どうせ無常の世なれば)同じこと為り(なり、というわけだ)。

切懸(きりかけ)だつ物に(鎧戸作りの板塀に)、いと(すごく)青やか(あをやかなる、青々とした)葛(かづら、つる)の心地よげに(が思いのままに)這ひかかれるに(這い覆う所に)、白き花ぞ

(白い花だけが)、おのれひとり(自分らしきそのままに)笑みの眉開けたる(屈託もなく咲いている)。(其を見て源氏が、)

「*遠方人にももの申す(をちかたびとにもものまうす)」 *原文注釈に依ると、「源氏の独り言。『源氏積』は「うち渡す遠方人に物申す我そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」(古今集旋頭歌 一〇〇七 読人しらず)を指摘する。その和歌の語句を引用したもの。「何の花ぞも」と問うのが真意」とある。引歌の背景は不明だが字面は、「道か川のずっと向こう側の人に大声で『ちょっとすいませ〜ん、あなたのそばに咲いている白い花は何という花ですか?』と聞いてみた」、ということのようだ。

と独りごちたまふを(という歌を思い出して独り言のように呟いていると、其の歌で白い花は何かと源氏が知りたがっている事を察したのだろうか)、*御隨身(みずいじん)ついゐて(衝い居て、膝座づいて)、 *「隨身ずいじん」は要人警護の近衛府軍人。中将には四人の付き添いと定められていた。従って此处では、中将たる源氏に其の四人の内の誰か一人が進み出た事になる。

「かの白く咲けるをなむ(あの白く咲いているものは)、夕顔と申しはべる(夕顔と言うもので御座います)。花の名は人めきて(名前こそ人並みですが)、かう(こうした)あやしき(卑しい家の)垣根になむ(垣根といったところに)咲きはべりける(咲くので御座います)」

と申す。げに(たしかに)いと(ずいぶん)小家がちに(こいえがちに、小さい家ばかりの)、むつかしげなる(むさ苦しい)わたりの(この辺りの)、このもかのも(此处も彼処も)、あやしく(貧しく)打ち寄る暮ひて(うちよろぼひて、荒れ放題で)、むねむねしからぬ(堂々としなない=見窄らしい)軒のつまなどに(軒先などに是の白い花々が)這ひまつはれたるを(這い纏っているのを見て)、

「口惜しの花の契りや(因果な花だな)。一房折りて参れ(一枝採って来て呉れ)」

とのたまへば(と源氏が宣えば)、(其の隨身は)この押し上げたる門に入りて折る(其の家の押さえ棒で支えられるほど粗末な跳ね揚げ板の門の中に入って夕顔を一房折り取った)。

さすがに(すると門はそのように粗末でも)、されたる(家の入口は其れなりに設えてある)遣戸口(やりどぐち、引戸の端に)に、黄なる生絹の単袴(すずしのひとへばかま)、長く着なしたる(少し大きめに着た)童の(女童が)、をかしげなる出で来て(可愛らしく出て来て)、うち招く(招くようにした)。白き扇(あふぎ)のいたう(強く)こがしたるを(香を薫き込めたものを差し出して)、

「これに置きて参らせよ(是に載せてどうぞ)。枝も情けなげなめる花を(そのままでは蔓が下垂れてしまう花ですから)」

とて取らせれば(と行って渡したが、其処へちょうど)、門開けて(乳母邸の門を開けて)惟光朝臣(これみつのあそん、惟光の奴が)出で来たるして(出て来たので、隨身は惟光に花を載せた扇を預けて)、奉らす(源氏に差し上げさせた)。

「鍵を置き惑はし侍りて(まどはしはべりて、忘れまして)、いと不便(ふびん、不都合)なるわざなりや(大変失礼致しました)。ものあやめ(物の良し悪し)見たまへ分くべき(見分けられる)

人もはべらぬ(高貴な人など居ない)わたりなれど(この辺りだというのに)、乱がはしき(らうがはしき、雑然とした)大路に(おほちに、大通りに)立ちおはしまして(お待ち頂きまして、申し訳御座いません)」とかしこまり申す(と惟光は源氏に畏まって申し上げる)。

引き入れて、下りたまふ(源氏は惟光に御車を邸内へ引き入れさせて、車からお下りになった)。惟光が兄の阿闍梨(あじゃり、真言宗高僧)、婿の三河守、娘(三河守の夫人)など、渡り集ひたるほどに(乳母の家族が丁度集い来ていて)、かく(このように源氏自らが)おはしましたる(見舞いに見えた)喜びを、またなきことにかしこまる(亦と無い事と皆々御礼申し上げる)。

尼君も起き上がりて、

「惜しげなき身なれど(私はもう死んでも惜しくはありませんが)、捨てがたく思うたまへつることは(心残りだったのが)、ただ、かく(このように)御前にさぶらひ(お目にかかる事では御座いましたが)、御覽ぜらるること(ご覧に入れる我が身の)変りはべりなむことを(身窄らしい変わり様を)口惜しく思ひたまへ(見苦しく存じ上げ)、たゆたひしかど(ためらっておりましたが)、忌むことのしるしに(出家の賜物で)よみがへりてなむ(少し回復し)、かく(このように)渡りおはしますを(お見えになった時に)、見たまへはべりぬれば(お会い出来たのですから)、今なむ(今はもう)阿弥陀仏の御光も(あみだぼとけのみひかりも、いつ御迎えがあつて阿弥陀様の光に包まれるとしても)、心清く(こころぎよく、潔く)待たればべるべき(お待ち申し上げられます)」

など聞こえて(などと源氏に申し上げて)、弱げに泣く。(すると源氏も、)

「日ごろ(このところずっと)、怠り難く(おこたりがたく、回復せず)ものせらるるを(すぐれないで居られるのを)、安からず(大変だと)嘆きわたりつるに(心配して居りましたが)、かく、世を離るるさまに(剃髪されて)ものしたまへば(尼に成ってしまわれたのは)、いとあはれに(とても悲しく)口惜しうなむ(残念です)。命長くて(長生きして)、なほ位高くな(私の出世などを)見なしたまへ(見届けて下さい)。さてこそ(それでこそ)、*九品の上にも(ここのしなのかみにも、極楽浄土の最高位にも)、障りなく生まれたまはめ(差し障り無く生まれ変われるでしょう)。この世にすこし恨み残るは、悪ろきわざとなむ聞く(悪い事だと聞いております)」など、涙ぐみてのたまふ。 *極楽に往生する際には、生まれ付いた上・中・下の三品さんぼんの其々に、現世の行で上・中・下の階が付くので、計九種の位階が定まる、という説。

かたほなる(出来損ない)をだに(であつても)、乳母やうの(めのとよう、乳母のように)思ふべき人は(庇い見る人は)、あさましう(あきれるほどに)まほに(立派な子だと)見なすものを、まして、いと(極めて)面立たしう(光栄にも)、なづさひ(親しく)仕うまつりけむ身も(御子に仕えた我が身さえも)、いたはしう(大切に)かたじけなく(勿体無く)思ほゆべかめれば(思われてならないようで)、すずろに(全てが)涙がちなり(涙を誘う)。

子どもは(乳母の子達は)、いと見苦しと思ひて、「背きぬる(尼に成って捨てたはずの)世の去りがたきやうに(この世に未練がましく)、みづから(自分の方から)ひそみ(泣き顔を)御覽ぜられたまふ(ご覧に入れている)」と(と困ったものと示し合う様に)、つきしろひ(小突き合つて)目くはず(目配せする)。

君は、いとあはれと思ほして(とても深く悲しんで)、

「いはけなかりけるほどに(幼かった時に)、思ふべき人びとの(庇ってくれるはずの母や祖母が)うち捨ててものし(先立って逝って)たまひにける(仕舞われた)なごり(其の後で)、育む人あまたあるやうなりしかど(育ててくれた人はたくさん居たけれど)、親しく思ひ睦ぶる筋は(頼りに思った人は)、また(他には)なくなむ思ほえし(居なかったと思います)。人となりて後は(元服後は)、限りあれば(決まりなので)、朝夕にしも(挨拶ひとつ)え(でさえも)見たてまつらず(お目にかかることなく)、心のままに訪らひ(とぶらひ)参づる(まうづる)ことはなけれど(気ままにお訪ねする事も無くて)、なほ久しう対面せぬ時は(やはり暫くお顔を見ないと)、心細くおぼゆるを(寂しく思って)、『さらぬ別れはなくもがな(生死の別れなど無ければ良い)』という歌を思い出します」

となむ(どのように)、こまやかに語らひたまひて(心を砕いて話されては)、おし拭ひ(おしのごひ、涙を拭き)たまへる袖のにはほひも、いと所狭き(ところせき)まで薫り満ちたるに、げに(本当に)、よに思へば(よく考えてみれば)、おしなべたらぬ(平凡ではない)人の御宿世(ひとのみすくせ、源氏の生い立ち)ぞかしと(だったと)、尼君をもどかしと(尼の母君を非難がましく)見つける子ども(見ていた子達も)、皆うちしほたれけり(皆思わず涙ぐんだ)。

(そして源氏は惟光らに)修法(ずほふ、加持祈祷の厄除け祈儀)など、またまた(再度)始むべきことなど掟てのたまはせて(命じ置かれて)、出でたまふとて(立ち去ろうかという時に)、惟光に紙燭(しそく、紙で包んで手に持つ灯り用の松枝)召して(掲げさせて)、ありつる(先程の夕顔を載せた)扇御覧ずれば、もて馴らしたる移り香(使い慣らした持ち主の移り香が)、いと染み深う(とても深く染み込んで)なつかしくて(奥床しく)、をかしう(美しく)すさみ書きたり(流し書きされていた)。

「心あてにそれかとぞ見る白露の、光そへたる夕顔の花」(和歌 4-1)

「其うかと思えば其の通り、思われる内が夕顔の花」(意識 4-1)

そこはかたなく(それとなく)書き紛らはしたるも(思わせぶりだが)、あてはかに(上品に)ゆゑづき(素養を備えて)たれば(ある歌なので)、いと思ひのほか(とても意外に感じて)、をかしうおぼえたまふ(源氏は扇の持ち主に興味を覚えられる。そこで)。惟光に、

「この西なる家は何人の住むぞ。問ひ聞きたりや(聞いているか)」

とのたまへば(とお尋ねになるが、惟光は源氏の)、例のうるさき御心(いつもの厄介な浮気心)とは思へども、え(さすがに)さは申さで(そうは言えず)、

「この五、六日ここにはべれど(此処の母の家に居りますが)、病者(ばうぎ)のことを思うたまへ扱ひはべるほどに(看病の世話をするばかりで)、隣のことはえ(何も)聞きはべらず(聞いておりません)」

など、はしたなやかに聞こゆれば(嗜めがちに申し上げると、源氏は)、

「憎しとこそ(面倒など)思ひたれな(思っているな)。されど、この扇の、尋ぬまほしきゆゑありて(尋ねたい事があると)見ゆるを(思うので)。なほ(さらに)、このわたりの心(この辺の事情を)知れらむ者を(知っている者を)召して問へ(呼んで聞き出せ)」

とのたまへば(と宣うので、惟光は奥に)、入りて、この(母の家の)宿守(やどもり、留守番)なる男(をのこ)を呼びて問ひ聞く。(話を聞いた惟光は源氏の許に戻って、)

「揚名介(やうめいのすけ、裕福なものが国司次官という肩書きを買った名目だけの官名)なる人の家になむ(になむ、ということ)はべりける(御座います)。男(をとこ)は田舎にまかりて(まかりて、出向いていて)、妻なむ(をんななむ、妻というのが)若く事好みて(若く派手好みで)、はらからなど(その姉妹などが)宮仕人(みやづかへびと)にて来通ふ(きかよふ、出入りする)、と申す(ということです)。詳しきことは、下人(しもびと、下働き)の(なので)え(よく)知りはべらぬ(分からない)にや(ということ)あらむ(ありましよう)」と聞こゆ(とお知らせした。其を御聞きになった源氏は、)。

「さらば(それなら扇の持ち主は)、その宮仕人ななり(その宮仕人の姉妹なのだろう)。したりしかるべき際にやあらむ(どうせ大した身分でもあるまい)」と思せど(とも考えたが)、さして(あのように)聞こえかかれる心の(歌を詠んで来た気持ちの)、憎からず過ぐしがたきぞ(憎からず見過ごし難いところこそ)、例の、この方には(こういう事に)重からぬ(動かされやすい)御心(源氏の心と)なめるかし(言うべきものだろう)。(そこで源氏は、)御豊紙にいたう(全く)あらぬさまに(別人のように)書き変へたまひて(品のない下手な字に書き変え為されて)、

「寄りてこそそれかとも見めたそかれに、ほのぼの見つる花の夕顔」(和歌 4-2)

「誰そ彼れかとする黄昏に、ようよう寄る世と夕顔の言う」(意識 4-2)

*女の贈歌は「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花(和歌 4-1)」とあって、この歌を受け取った源氏は「白露の光」は角度で変わるから「如何思つて頂いても構いません、見て頂けるだけで光栄です」という女の挨拶だと読んだ。実際、一行は乳母邸の門が開くまで、西隣の家を蔓が青く覆う中に白く咲く夕顔を見ていた。鄙にも稀な美しさの夕顔を評して隨身は、名前は良いが貧家に咲く、と言った。この掃き溜めに鶴の夕顔を源氏はさらに、掃き溜めにしか住めない鶴、と因縁付けた。これらの源氏一行の「それかとぞ見る」花の見方を、「如何思つて頂いても構わない」、と女は言う。ただ今の内容を女が歌にした事で、自らを夕顔の花に準えた事に為ってしまう。其れがイヤなら初めから歌など贈らない。また源氏の方は、其の家の女の影に興味津々ではあったが、確かに夕顔の花を見てただけで、期待はともかく、少なくとも歌が贈られるとは予見していなかった、ワケだ。其れも意外に上品な筆使いの歌だった。そこで女の素姓を探ったが、やはり卑しそうだった。で、粗末な家の女を軽んじた源氏は、女を見下して先ずは否してみようとした、ということか。字面は、「近付いて誰が其れほど美しいのか確かめましよう、ただ夕暮れにぼんやり花の夕顔を見ていただけでは分からないので」、という事で本当の所かもしれないが、返歌としては贈歌の意を無視した無礼な言い草だ。しかし、さすがに品はいい。「たそかれに」の「誰そ彼れに」という侮りを、「黄昏に」で覆って「ほのぼの」と尊顔を拝す恭しさを漂わせる。この後節から前節を見直せば、「是非御近付

き願いたい、その思いで夕顔の花を見ていました」、との返礼にはなっている。それでも「それかとも見ぬ」のぞんざいさは気に掛かる。自分の「それ」は謙遜でも、相手の「それ」は蔑視だ。この態ときは巧みだ。

ありつる御隨身して遣はず(先程の隨身に届けさせた)。

(返歌を受け取った女たちは)まだ見ぬ(まだ誰とも知らぬ)御さまなりけれど(歌の御相手だったが)、いと(とても)*しるく(はっきりと)思ひあてられたまへる(或る方に間違いないと御推察申し上げた)御側目を(格子戸越しの御横顔を)見過ぐさで(見逃さずに)、さし(歌を差し上げて)おどろかしけるを(見破って御覧に入れたのに)、答へたまはで(返歌を頂けないままに)ほど経ければ(暫く経っていたので人違いだったかと)、なま(何だか)はしたなきに(極まりが悪かったところに)、かく(このように)わざと(あっさりとした御返事ではなく、わざと)めかしければ(戯れめいた返歌を頂いたので)、あまえて(興に乗って)、「いかに聞こえむ(どう御返事いたしまししょう)」など言ひしろふべかめれど(などと言いつつ合っていたようだが)、めざましと思ひて(その女たちの分を弁えぬ有様に呆れて)、隨身は参りぬ(隨身は早々に帰参して来た)。 *「しるく著しく一分かった」とは何事か。「未だ見ぬ御様—知らない」と言ったばかりではないか。この文はイヤになるほど難解だ。要するに此処の家の女たちは源氏を誰かと勘違いしているワケだ。そして其の行き違いに、此処の女たちは半信半疑で、源氏の方は全く以って気が付いていない、ということのようだ。また女たちが誰と源氏とを間違えているのかも示されていない。それなら外形的に其う書けばよさそうだが、例によって内視的で尊敬と謙讓の使い分けに依る主語省略の何とも分かり難い書き方だ。しかも其うだとすると、女が源氏に遣した歌の意味は全く違ってくる恐れがある。というより、源氏の立場からしか読んでいないので、必ず本意は別にある。しかし女の立場は示されていないので、今は他の読み方が出来ないから、後で必ず見直さなければ為らないワケだ。推理小説風なもの現代文なら読み返すだけで良いだろうけど、何せ古文の解説と来た日にゃア、こちとら其の軌跡のノートまで強要されちまう。言葉隠しの妙でもある和歌の特性が、その場その場で読み下せてしまうウラミを、身を以って体験させられるワケだ。全く以って、有難い。

(源氏一行は)御前駆(おんさき)の松明(まつ)ほのかにて(小さく灯して)、いと(極く)忍びて(ひっそりと)出でたまふ(六条へ向けて出発した)。(夕顔の家の)半蔀(はじとみ、シトミ窓)は下ろしてけり(既に降ろされていた)。隙々(ひまひま、窓の隙間)より見ゆる灯の光、蛍より異に(けに、一段と)ほのかに(微かで)あはれなり(趣き深かった)。

御心ざしの所には(御目当ての六条の女の家には)、木立(こだち)前栽(せんざい)など、なべての所に似ず(並の所とは違って)、いと(とても)どかに心にくく(とてもゆったり趣を心得て)住みなしたまへり(暮らして御出ででした)。うちとけぬ(まだ打ち解けぬ)御ありさまなどの(女御との気遣い合いなどの)、気色ことなるに(情緒は格別で)、ありつる(先程の)垣根(夕顔の家などとても)思ほし出でらる(思い出している)べくもあらずかし(場合ではなかった)。

翌朝(つとめて、情交に耽った翌朝は満ち足りた安堵からか)、すこし寝過ぐしたまひて、日さし出づるほどに出で給ふ(いでたまふ、お帰りになる)。朝明(あさけ、朝の光に映える源氏)の姿は、げに(実に)人のめできこえむも(世間が褒め讃えるのも)、ことわりなる御さまなりけり(尤もな美しい御姿で御座いました)。

今日も(今朝も帰宅途中で源氏は)この薮の前(五条の半薮の夕顔の家の前を)渡りしたまふ(通り過ぎされた)。来し方も(今までの六条通いでも)過ぎたまひけむ(通り過ぎされていた)わたりなれど(辺りだったが)、ただはかなき一ふしに御心とまりて(僅か彼の一篇の歌に惹かれて)、「いかなる人の住み処ならむ」とは、往き来に(ゆききに、往来の度に其の家が)御目とまりたまひけり(御目に止まっていたらっしゃいました)。

[第二段 数日後、夕顔の宿の報告]

惟光、日頃ありて参れり(惟光が数日後、参上してきた。そして、)。

「わづらひはべる人(病人が)、なほ(依然)弱げにはべれば(弱っております)、とかく(何かと)見たまへあつかひてなむ(看病に当たっております、参上が遅れました)」

など、聞こえて(挨拶してから)、近く参り寄りて聞こゆ(源氏に近付いて低く申し上げた)。

「仰せられしのちなむ(お話があつてから)、隣のこと知りてはべる者(隣家の事をよく知る者を改めて)、呼びて問はせはべりしかど(呼んで話を聞きましたが)、はかばかしくも申しはべらず(はっきりとは申しません)。『いと忍びて(ごく内密に)、五月(さつき)のころほひより(の頃から)ものしたまふ(同居している)人なむ(人というのが)あるべけれど(あるようだが)、その人とは(其れが誰とは)、さらに家の内の人(に)だに知らせず(家の使用人にさえ知らせていない)』となむ申す(とのことです)。

時々(時に私も)、中垣のかいま見しはべるに(境の垣根から覗いてみますが)、げに(たしかに)若き女どもの透影見えはべり(若い女たちの人影が透いて見えます)。(其の女どもが)褶(しびら、略礼腰飾り)だつもの(のようなものを)、託言ばかり(かごとばかり、言い訳程度に)引きかけて(不恰好でも使用人の仕事着なので一応は着けて)、かしづく(仕えている)人はべるなめり(主人が居るようです)。

昨日、夕日の名残無く(なごりなく、余す所無く夕顔の家に)さし入りてはべりしに(差し込んでおります)、文書くとてゐてはべりし人の(手紙を書くのに座っていた其の主人の)、顔こそ(顔といえは)いとよくはべりしか(とても良いもので御座いましたな)。もの思へるけはひして(物思いに沈んだ様子で)、ある人びとも(側仕えの女たちも)忍びてうち泣くさまなどなむ(忍び泣きしていたのが)、しるく(はっきりと)見えはべる(見えました)」

と聞こゆ(ということだった)。君うち笑みたまひて(君は頬苦相笑まれて)、「知らばや(もっと知りたい)」と思ほしたり(とお思いになった。其の源氏の表情を見た惟光は、)。

おぼえこそ(世評こそ)重かるべき(大事にすべき)御身のほとなれど(高い身分だが)、御よはひのほど(若さと)、人のなびきめで(人が心惹かれ讃えると)きこえたるさまなど(噂される御容貌などを)思ふには(思えば)、好きたまはざらむも(源氏が色恋遊びを為されないというのも)、情けなく(つまらなく)さうごうしかる(物足りなくは思える)べしかし(ものだが)、人のうけひかぬ(世間の通りが悪い)ほどにて(程の身分差がある相手)だに(よりも)、なほ、さりぬべき(分相応

のあたりの(身分の)ことは(相手の方が)、このまじう(好ましく)おぼゆるものを(思えるものを)、と思ひをり(とっていた)。

「もし(それで)、見たまへ得ることもやはべると(幾らか事情も知れるかと思ひ)、はかなきついで作り出でて(其処の家の供の女と知り合つて)、消息など遣はしたりき(其の女に気を引くような手紙を遣つてみました)。書き馴れたる手して(すると遊び慣れた手で)、口とく返り事などしはべりき(素早く返歌を返してきました)。いと(なかなか)口惜しうはあらぬ(筋の良い)若人どもなむ(使用人どもといったところが)はべるめる(居るようです)」

と聞こゆれば(と惟光が申し上げると、源氏は)、

「なほ言ひ寄れ(もっと口説き続けよ)。尋ね寄らでは(事情が知れなくては)、さうざうしかりなむ(事が捗らぬ)」とのたまふ。

かの、下が下と(しもがしもと)、人の思ひ捨てし(世間が見下した)住まひなれど、その中にも、思ひのほかに口惜しからぬを(掘り出し物を)見つけたらばと(見つけたのかもしれないと)、めづらしく(興味深く)思ほすなりけり(源氏はお思いになっていた)。